神様の好奇心は人をも殺す

all

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様の好奇心は人をも殺す

【Ｎコード】
Ｎ８２６３Ｙ

【作者名】
ａｌｌ

【あらすじ】
神様の好奇心によって殺されたも同然の高校２年生の神坂望。
責任を感じた神は望を異世界に転生させた。
そう望が四六時中していた「妄想」を現実にできる世界に。

プロローグ　―異世界への転生―（前書き）

始めまして、小説始めました。
このような執筆作業は初めてなので誤字や日本語としておかしい部分が多々あるやもしれませんが生暖かい目で流すように読んでいただければ幸いです。

プロローグ　ー異世界への転生ー

彼、神坂望(かみさかのぞみ)はいつものように歩道を歩き交差点で止まり、信号が青になったらまた歩き出し、学校へ向かう。

朝の7時半。朝日を体に浴びながらいつものように同じ道を歩きいつものように学校につく――はずだった。

事は学校の裏にある信号のない小さな交差点で起こった。

「それ」はまるで十字路を渡る望が見えていないかのようなスピードでこちらに突っ込んできた。

横によけては間に合わないと「判断」した望は四六時中やってたいた妄想どおりに体を動かす。

ボンネットに手を付き、体を浮かせ、背中に背負っていたカバンをフロントガラスに打ち付けるようにしてダメージを殺す。

（妄想成功！）

ガッという音が響き、ボンネットの上に体を預け――「それ」がスピードを落とした。

「それ」いきなりブレーキが効いたかのようにスピードが落ちた。

慣性の法則により打ち出され大通りにでてしまう。

次の瞬間、トラクションの音が鳴り響きその中に鈍い音が混じっていた…。

これが神坂望が異世界に転生することとなった世界で最後の出来事である。

この世界の神様はあまり人間に手を出すことはなかった。

というよりもともと興味があんまりなかった。

しかし世界に常識があって非常識があるのなら、神世界(しんせかい)でも非常識と呼ばれる神はいるものである。

そしてその神の世界での非常識と呼ばれる神は望の妄想を知り、面白がり、試したのだ。

人間とはどこまで「準備してある物事」に対処できるのかと。

つまり、望がいつも通学路でやっている「交通事故の対処法(どうやってかっこよくかわすか)」という現実味のある妄想を現実に引き起こしたのだ。

運転手から望の姿が見えなかったのは神のいたずらであり、それが結果一人の人間が逝った。

神は責任を感じた。神のいたずらは一人の人間の、いやその周りの人間のも含めて全員の未来を狂わせたのだ。

家族友人はもちろんのこと、クラスメイトや担任の先生等は十分に周りの人間に該当するだろう。

望は転生者に、そして神は祈った。

そしてその神は世界に手出しすることを自ら禁じそれ以降世界をのぞこうともしなかった。

その神が上位神によって「天罰」を受けたのはどうでもよく、知らなくてもいい現実(神世界)。

重要なのはこれにより望という転生者が生まれ、異世界で生きていくことになったということ。

そして、望は異世界で二度目の人生を生きるということである。

神がその異世界での生活を見守っていたのも彼にとっては知らない、知らなくていい現実。

プロローグ　―異世界への転生―（後書き）

転生物を多く読み流されるように書き始めてしまいました。
投稿は不定期です。

神坂望改めエリック・シルフィールド三歳（前書き）

異世界は基本、絶対基準が私の妄想であるためこの筆者が生きている世界と発展の仕方が違うのはご了承ください。
つまり、世界と異世界では思考の仕方が違うため基本となる常識が異なっています。
極端な例にするなら「人間と精霊では考え方が違う」みたいなものと同じです。
攻撃方法、つまり世界（現実）で「妄想」した魔法での戦い方と異世界の魔法での戦い方は違う。
さらに言えば食生活で食べ物を腐らせる（醗酵）ということを考え付かなくてもなんら不思議ではないということです。

結論として、この小説（もどき）の異世界の人間はこちらの常識では計れないということです。
さらに言うなら登場人物は人間ではない、もしくは人間に似た動物と考えていただいても結構です。
なのでこのことを踏まえてこのページでの画面スクロールをお願いします。
それでは転生というアドバンテージを持った精神年齢高校生から始まる「妄想が日常」の神坂望の日常をお楽しみください。

神坂望改めエリック・シルフィールド三歳

転生者

転生の言葉の意味としては、前世の知識を持ったままもう一度人に生まれること。これには動物を含めて転生する説もある。

ここでは、転生者とすることで人が人に生まれることを指すことにする。

そして、転生者はそれだけでアドバンテージになることが多い。

転生先が異世界であったり、現在(いま)の世代より古ければ古いほど技術や人の精神や考え方が発展していないためである。

未来に生まれたってその未来の人たちと常識が違うのだから新しい発見が可能かもしれない。

もう一つ、転生者にとって決定的なアドバンテージがある。

なにせ生命が生まれた瞬間から自我の確立ができているのだから…。

三歳になった。

昨日誕生日だった。

特に何をするわけでもなくただ生きている。

要するに退屈なのだ。

いや少し違うか、興味をそそるものがないのだ。

いやこれも少し違う。

興味あるものに触らせてもらえないのだ。……うんしっくりきた。

毎日自分の部屋から外を見るだけ。

自分の家族が住んでいるところはたぶん高級住宅地。

家に面している通路は歩いている人たちは少なく逆に馬車とかが多かった。

大通りが少し見える。人とか露天とか、沢山いて沢山あった。

人ごみは前世では嫌いだったけど今じゃ地下鉄の混み具合が懐かしい。

うん、暇だ。

成熟したとはいえない、未熟(高校二年生)な精神だがこれは常人だと発狂レベルですよ。

目の前に！体の中に！「魔法」や「魔力」と呼ばれる未知なる力が眠っているというのになーんで我慢せなならんのか！

自分は生まれる前から意識はあった。今でも記憶はある。体の中に気味の悪い力が眠ってたのにも気づいた。

このことから自分に何らかの力があり、異世界に転生したのでは？と仮説を立てた。――結果その通りだったわけだが…。

まぁ、その力(魔力)のおかげか生まれるまではまるで油の浮いた砂糖たっぷりサイダーのプールに入っているかのような気持ち悪さだった。

その上、体は思うように動かないしただじっとしてるだけ。

いつ出産されるかもわからない、そんな状態でずっと我慢していた私。

あれは地獄だ…。いや地獄だった…か。

毎回地獄を思い出してどうにかこの退屈と比較して「まだましだ」と思いながらも、さすがに限界だ。

その出来事(きっかけ)が誕生日パーティーだ。

誕生日パーティーを両親が親戚や貴族を呼び祝ってくれたのだが、これがこれがまたまた面倒だった。

なんで三歳児が貴族の面々に挨拶回りせにゃならんのだ！ともう内心何度叫んだことか…。

自分の子供を何かしらの分野で認めてくれているならさっさと魔法教えてくれよ…。

周りに同年代の子供はいないし完全大人だけの世界。

どうやら貴族たちへのサプライズみたいなものだったらしい。

いや、ここはどう考えたって子供の成長を促すために同年代の子供に会わせるべきだろう…。

言葉とかさ、まだぜんぜん完璧に覚えているわけでもないし発音も舌足らずだし、会話こなさなきゃ覚えらんないよ…。

どっか違うというか抜けていてずれているそんな自分の父親ダニエル・シルフィールドと母親サラ・シルフィールド。

両方結構めんどくさい性格をしている。それでいて結構な貴族である。

が、なんというか人(善人)を驚かせる事に人生かけているような人(悪人)だ。

相手は本当に誰でもいい。騎士団長を相手にしたこともあるのだ。

時たまにある人物からサプライズの依頼が来ることもあるらしい。

本業おろそかにしてない？これも本業のうち？

自分が巻き込まれなければドッキリカメラ映像を見ているようなも

のだった。

しかし、巻き込まれるとタチが悪いじゃすまない。

というか三歳児をサプライズの相手にするというその精神が知りたいよ。

さらに、世界(元いた世界)に魔法があって、異世界(こちらの世界)では魔法がある。

この違いだけでドッキリの部分がどれだけ前の世界と違うかわかってくれると思う。

ああ、自分も早く魔法を使いたい…。

三歳になったんだから許してくれないだろうか？

あ、女から男になりました。

あーもう月ものとか考えなくていいから楽！

もう下のことなんて特に気にしなくなりましたとも！

ええ！気にしなくなりましたとも！

もう無意識でいいよ。

神坂望改めエリック・シルフィールド三歳（後書き）

名前が思いつかない。
名前だけに１５分かかってしまいました…難しい。
精神は肉体の影響を受けると某吸血鬼Ｋさんが言っていたのを思い出しました。
言動は肉体に影響されていきます。でもやっぱり根っこの部分は女性で。

いけたらいいなぁ。

台詞の掛け合いとかもぶっつけ本番。
読めるようなもの書けたらいいなぁ。
妄想とかはもうちょっと後で。

魔法、魔力の勉強法？（前書き）

サブタイトルも難しい。

魔法、魔力の勉強法？

基本と応用

物事の「基本」というのは土台部分であり、その土台を固めていく必要がある。
建築物で例にするなら地中に埋めた基礎部分だろう。
応用は基本の上に積み上げる「モノ」であり、建築物の見た目部分にあたる。
なら建造物の間取り等の中身は？
経験である。

「親父！おれにまほうをおしえてくれ！」

「・・・あー、魔力の使い方なら教えてやろう」

「それってなにかちがいがあるの？」

「さすがにまだわからんよな」

わかってますけどね。

うん三歳なんだからこれぐらいがたぶんベスト。

違いが分かったらさすがにおかしいだろうし。

自分は両親が自分を転生者ということを知らないままでいてほしい。
特に理由はないし本当の息子として生まれてくる魂を押しのけた自転生者分に罪悪感を感じたことはないといったら嘘になるけど面倒事なんて極力避けたい。

破天荒な両親のことだからたぶんないとは思うけど放りだされる可能性が無い訳ではないし。

ん？日本語が微妙におかしい・・・か？

日本語の話し相手がいないからいつも自問自答しかしていない。

独り言が最近寂しくなってきた。

ま、閑話休題（それはそれとして）

魔法に興味を持ち出すのは三歳からが多いらしい。

好奇心が高い時期だからだろうか。

いやーどうでもいいや！とりあえずテンション上がってキター！

「ん、よし。それじゃ始めよう。といってもどうしたもんか。」

「え？」

「…まぁいいか。とりあえず俺の魔力を流し込んでみるからそれを外にはじき出してみろ」

「そとにだせばいいの？わかった。」

そういうと親父は手をつかんできて――――いきなり寒気がしてきた。

自分が別の何か、自分じゃないものに侵されていくようなそんな感覚。

自分が自分じゃなくなる――いやだ！

その時、バチン！と空気が震えて親父が数歩よろけた。

親父が青い顔でこっち向いてる。

あーやばいかも？なんかやっちゃった？

「…よ、よし。基本ができてるなすごいぞ。」

いや、今の基本が出来てたって顔じゃなかったよ？

今は仮面（ポーカーフェイス）かぶってるのか平常に見えるけどあの顔は…おかしいよ。

「うん。ちょっと父さんは仕事があるからなまた後でな」

呼び止めるまもなく部屋を出て行った。

うん、逃げられた。

いや、逃げてくれてよかったかも。考えをちょっと纏めよう。

魔力の操作方法の基本は出来ている。終了。…じゃなくて

あの驚きっぷりから見ると基本以上のことが出来ているってこと。

魔力量が多かったのか魔力の使い方(操作)が上手だったとかそんなところだろうか。

前者はどうやって調べればいいのかわからん。自分しか基準がないからなぁ。

後者は後者でまたわからん。どれだけ滑らかに動かせるとかそんな感じなのかな？

毎日やること本当になくて魔力(油の浮いたソーダ)に慣れることばっかりやってたからそれが原因かな？

あとは子供ながらの成長力。大人(高校二年生)の精神と子供の本能力(なんじゃそりゃ)で成長が著しいとかか？

まぁなんにしても、魔法に対して転生者としてのアドバンテージが出たところか。

転生者はやっぱりチートに入る域にあると思うんだ。うん。

三年間魔法の制御だけしかやってないんだから当然っちゃ当然なのかも。

ほかにもこの世界、技術発展してないしお金に困るとはないとは思うけど、技術見せ付けて必要以上に目立つなんてこと、したくないしなぁ。

絶対妄想力豊かなどこぞの馬鹿共に改良されてしまうと思う。

んで戦争と。自分の発想が戦争に使われるなんてそんな後味悪いことしたくないしなぁ。

自衛のために使っちゃいますけどね～。

んじゃ親父どのの反応を待つとしますか。

…いまさら不安になってきちゃった。

気づく(転生)わけないと思うんだけどやっぱり少し不安になるなぁ。

魔法、魔力の勉強法？（後書き）

主人公の特別は基本、あの世界での妄想とこの異世界に転生したことです。
もちろん知識もですが。
基本の上には応用もありますけどね？

投稿時間は何時にしたらいいんでしょうか。
とりあえずまた１９時にしておきました。

投稿は一週間に一回出来れば良いほうだと思います。
それでは次話で

父親の反応は家庭教師と専属メイド（前書き）

人によっては超大作のある生き物を思い出すかもしれません。
そのあたりはご了承を

父親の反応は家庭教師と専属メイド

能ある鷹は爪を隠す

狩をする鷹が爪を出していたら獲物に見透かされることの意味。
これを実行するには世界の常識と自分の常識を重ね合わせていつでも自制をしなければいけない。
ではまだまだ未熟な精神である私《転生者》はいつまで自重することが出来るのだろうか。

父が逃げた次の日
「はじめましてエリック様。私は魔法の家庭教師として呼ばれましたユアンです。どうぞよろしく」

「はじめましてエリック様。私はエリック様の専属メイドとなりましたアンナ・フリーエルです。これからよろしくお願いします」

父よ、私はあなたの反応を予測し切れなかったようです。予想外デス。

家庭教師はうれしいんだけど…座学を三歳児からやらせるつもりか。
私は能力的問題ないと思うけど…自分の時三歳児って勉強したっけ？（高校二年）
……天才児として祭り上げられるのはごめんだしもっと自重したほうが良いね。

あと専属メイドか。
こっちはちょうど良いかも。
でも冷静に考えたら何で今？魔法を勉強するから？
…あ～道徳みたいなものか。
つまり私の父親は道を踏み外さないように心の鍛錬もしようって画策したわけだ。
そういう心遣いはありがたい。
でもメイドなんてこの家で見たことなかったんだけど…。

専属メイドアンナさんの場合
「では、エリック様何なりとお申し付けください」
まさにメイド！っていうのが第一印象だったアンナさん。
艶やかな茶色の髪、キリッとした規則に厳しそうな目、出るとこ出てはいないけどスレンダーと言っていい体。
その直立姿勢で待機している姿はメイドさんそのもの。

似た目年齢二十代後半ぐらいかな？とか考えたらなんか寒気がした。
……あまり考えないようにしよう。

「えと、さっそくしつもんなんだけどメイドさんをこの家でいちども見たことないんだけど」

「それは当たり前でございます。メイドは主人の前に姿を見せずに仕事をする。そのことを主人への礼儀としていますから」

え？

「それじゃあこの家にはいまどれぐらいのメイドさんがいるの？」

「ダニエル様の専属を含めますと４人このでしょうか。料理人を含めればもう少し増えますが」

つまり、もともとフリーは三人いて自分はその三人にまったく気づかなかったわけだ。

なんか怖！

メイドさん侮りがたし。アキバの路上メイドとかとはやっぱりちがうね。

貴族なのに従者がいないのはおかしいとは思ってたけど、そんな理由だったんだ。

にしても自分専用か～なんかもったいないね。自分の前世からの価値観はいったん崩壊させたほうが良いかも。

でもこれでメドが立った。両親とも忙しいしこれを頼むのは躊躇してたけど。

おっと、子供らしく子供らしくっと。

「せんぞくって自分だけっていみだよね？」

「はい。私はエリック・シルフィールド様の専属メイドです」

「それじゃあ、親に内緒にしてほしいことがあってそれを言わないでといったら？」

「エリック様に危険がなければもちろんそれに従います。」

「ぜったいに？」

「絶対でございます。運命と月の神ルナ様に誓って。」

「それじゃあやりたいことがあるんだ…。」

家庭教師ユアンの場合

「では改めまして、このたびエリック様の家庭教師として呼ばれましたユアンです。よろしくお願いします」

「よろしくおねがいします」

こっちはー４０代後半のオジサン…はちょっと失礼かもしれない。
でもそれぐらいしか浮かばない。
髪は金色でちょっと派手。顔は特徴がないね。
服装も魔法に関わっている人には見えないし…特徴のない４０代か。
うん、一般人の４０代のオッサンにしか見えない！あれ？さっきより印象悪くなってないか？まぁいいや。
「まほうのべんきょうって何をするんですか？」
「はい。ダニエル様から多少駆け足（スパルタ）でもよいので魔法の基礎を教えるように言われましたので…」
目の前にちょっと分厚い本が２冊ほど置かれた。
ってことはやっぱり座学ですか。
私って三歳児だよね？
あれ？もしかして文字読めるって思われてる？
「あの、まだ文字おぼえてないんですけど…」
「……」
まぁそうなりますよね！？
「…それではまず文字から覚えましょうか。最低限、日常生活に支障がない程度になったら魔法を勉強するということで」

「すみません親父が無茶を…よろしくお願いします」

文字は居心地の悪さと魔法への好奇心から二十日程度で覚えることが出来た。けど…

先生が顔を青くしてました。またやっちゃったよ…。

これからは七日に一回のローテーションで魔法の勉強をするとか。

本職が始まったらしい。

なんの職業かは教えてくれなかった。

魔法を勉強し続けてればまたあえるらしい。

そのまた会えるときを少しは楽しみにしていよう。

父親の反応は家庭教師と専属メイド（後書き）

台詞の時にエリックが父親を呼ぶときに「親父」になるのは男言葉を少し間違って覚えているから。
とか無駄設定考えるのは結構好きだったり。

母親は父親より忙しいという設定です。

初めてのお気に入りがありました。思わず小さくガッツポーズ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8263y/

神様の好奇心は人をも殺す

2011年11月30日19時52分発行